放眼日中

鉄道型の日本、バス型の中国

先日、中国河北省の張家口に初めて行った。張家口と言えば、北京と共同で2022年の冬のオリンピックを開催する場所になっているが、今の時点では、オリンピックムードはどこにもなかった。50キロ離れた郊外でスキー競技などが行われるため、そちらの準備は始まっているとのことだったが。

その張家口からバスに乗って、内モンゴル自治区の呼和浩特へ向かった。地元の人から「鉄道で行くより、バスで行った方が便利」とアドバイスを受けたからだ。ところが、バスターミナルで正午にバスに乗ったのに、その後、街中の道端で乗客を拾い、高速道路脇には小型バンで数人の乗客が運ばれてくる。高速道路にようやく乗ったのは午後2時で、鉄道で行くのと同じぐらい時間がかかってしまった。さらには、高速道路にはバス停が無いにもかかわらず、乗客が道路脇に立っており、何人も乗り込んできた。

高速道路には人が入れないようになっているはずだが、その金網を破り、道路に上がってくるのである。こんなことは日本ではおよそ考えられないことであるが、中国でよくある光景だ。なぜ起こるかというと、一つは乗客がバス停がある街まで行かなくてもよいという、つまりは〝利便性〟。そしてもう一つが、中国特有の現象だと思うが、バス会社にもうまみがあるということ。

「バスの課税対象の売り上げは高速バスの場合、高速に乗る時点の乗客数で算出する」とある専門家は教えてくれた。高速道路で乗り込んだ乗客は、乗っていないことになっているが、運賃は払っているのである。そしてもちろん、このバスは呼和浩特でも路線上なら、乗客の要請でどこでも止まる。

一方鉄道は、線路の上を走るので、そのような融通は全く利かない。ただ、決められた時間を遅れないように走って行くだけである。当然、そこで働く乗務員にも厳格な対応が求められる。日本人にとっては、いつ着くか分からない田舎のバス路線より、鉄道に乗ってゆっくり旅する方が安心だと感じることだろう。日本人というのはある意味で、その多くが鉄道型なのだな、としみじみ思う。

厳格に敷かれたレールの上を走って行き、決められた時間に目的地にきっちり着く。それで安心できるタイプである。一方、これまでの中国人は田舎のバス型ではなかっただろうか。激動の中国を生き抜いていくには、既存のレールが常に信じられるわけではない。それより、自らにとって有利だと思う方に賭けていく。うまくいけば、メリットも大きいが、下手をすると損失を被る。バスのように道路があればどこへでも行ける方が、いざという時には間違いがないと信じている。

しかし、最近中国人は日本人と大きくは変わらないようにもみえる。鉄道型が増えているのは、前述のバスには若者がほとんど乗っておらず、鉄道には若者が実に多く乗っていることからも何となく推測できる。中国全土に張り巡らされつつある高速鉄道網。これまで数十時間かかっていた路線を数時間で行けるようになり、時間も計算できる。この利便性があれば、誰でも鉄道型になっていくのか。

中国人が軌道の上を慎重に歩いて行く姿は想像し難いのだが、スピードがあれば行くだろうか。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。